

紀 要

第 16 号

2003. 3

財団法人 滋賀県文化財保護協会

縄文時代における貯蔵穴の数と容量の推移

—関西地方での貯蔵経済の出現と展開に関する基礎的検討—

瀬口 眞司

1. 本稿の目的

本格的な定住生活の開始は、余剰財の蓄積を促進させ、社会的不平等を生む根元になる。人類史において、本格的な定住生活の開始は一大画期である。

定住生活そのものを促した要因には、農耕経済の採用がまず考えられた。1930年代のことである¹⁾。

20世紀後半になると、世界の人類学・考古学では、貯蔵経済²⁾への移行も、定住生活の要因になることが提示され、議論され始めた³⁾。

筆者の立場は、前者だけでなく後者も重視しながら、列島の先史社会を照らそうとするものである。先史社会の移ろいを探る上で、農耕の出現・展開と同様に、貯蔵経済の出現・展開は重要なテーマだと考える立場である。

貯蔵経済の出現を明確に示すのは難しい。しかし、貯蔵に関係する遺構の数や容量の増減から、貯蔵行為の強化傾向やその緩和は、なんとか見出せるだろう。実際問題として、貯蔵行為を強化し始めたのはいつだろうか。

貯蔵経済の根幹にある装備として、代表的に考えられているのは貯蔵穴である。1970年代の検討では、西日本の貯蔵穴は、縄文後期以降に増大するとされてきた⁴⁾。

21世紀初頭段階の資料集成をもとに、関西地方の資料数を数え直すと、その増加期は縄文中期後葉にみえる。そこで筆者は、この時期に貯蔵を本格的に重視し始めたと考えた⁵⁾。

しかし、本当に縄文中期後葉に貯蔵穴は増大し、

貯蔵行為は強化され始めたのだろうか。この問いを改めて突き詰める必要がある。

というのも、貯蔵穴が増加する縄文中期後葉には、遺跡数も大きく増加するからである。社会と経済のあり方とは無関係に、遺跡数全体の増加に比例して、貯蔵穴が増加したケースもありえる。となると、貯蔵行為を重視するあり方への移行と無関係であるにもかかわらず、それを過大評価してしまう可能性がある。潜在的にそれを危惧する研究者は少なくないだろう。

貯蔵経済を重視し、貯蔵行為を強化し始めたから、貯蔵穴が増加したのか、それとも単に遺跡数全体の増加に比例しただけなのか。実態はどちらに近いのか。本稿の目的は、この点を少しでも明らかにすることにある。

2. 方法と検討対象

(1) 方法

本稿の目的を果たすために、ここでは1遺跡あたりの貯蔵穴数と容量を、時期ごとに算出し、推移を把握する。

遺跡数の増加に比例して貯蔵穴が増加しただけならば、1遺跡あたりの貯蔵穴の数と容量は、時期を通じて大差がないはずである。

そうではなく、貯蔵行為を重視するあり方へ移行したがゆえに、貯蔵穴が目立つようになったのならば、1遺跡あたりのその数と容量は、移行期に大きく増大するはずである。

表1 時期区分

縄文早期	前葉	ネガティブ押形文	縄文後期	前葉	中津式～北白川上層式Ⅱ期
	中葉	ポジティブ押形文		中葉	北白川上層式Ⅲ期～元住吉山Ⅰ式
	後葉	条痕文		後葉	元住吉山Ⅱ式～宮滝式
縄文前期	前葉	羽島下層Ⅰ式	縄文晩期	前半	滋賀Ⅰ式～Ⅲa式
	中葉	羽島下層Ⅱ式～北白川下層Ⅱa式		後半	篠原式～長原式
	後葉	北白川下層Ⅱb式～大歳山式			
縄文中期	前葉	鷹島式～船元Ⅰ式			
	中葉	船元Ⅱ～Ⅳ式			
	後葉	里木Ⅱ式・咲畑式・北白川C式			

そこで本稿では、1遺跡あたりの貯蔵穴の数と容量を、時期ごとに算出し、推移を把握する。

(2) 検討の対象

対象時期は、縄文早期前葉～晩期後半とし、時期区分は、表1に示すような大別時期を用いて示す。

貯蔵穴資料の検索対象地域は、福井、三重、滋賀、京都、兵庫、奈良、大阪の各府県である。幸い、この地域に関しては、生業遺構の優れた集成⁹⁾がある。今回はその恩恵に浴することとし、貯蔵穴とされたデータをそこから網羅的に抽出して整理する⁷⁾。

一方、遺跡数のデータは、滋賀県域、京都盆地、奈良県域、大阪府生駒山西麓地域に限る。正確な把握がこの地域にほぼ限られているからである。

3. 1遺跡あたりの貯蔵穴の数と容量

(1) 遺跡数とその推移

遺跡数について、現状で把握できるのは、滋賀県域⁸⁾、京都府京都盆地⁹⁾、奈良県域¹⁰⁾、大阪府生駒山西麓地域¹¹⁾の各エリアにほぼ限られる。関西地方全域のデータは残念ながら出揃っていない。

しかし、本稿で重要になるのは、相対的な時間的差異であって、絶対量ではない。そこで、今回の検討では、このデータを用いて検討することにする。

各エリアの推移グラフは、図1の(1)～(4)のとおりである。若干の相違はあるが、きわめて近似した傾向にある。従って、関西地方全体の傾向を、各エリアの合計値で推測しても大きな問題はないだろう。

図1の(5)に、各エリア合計値の推移を示した。画期ごとに傾向を述べる。

縄文早期前葉～中期中葉

大きな変化はなく、40遺跡程度で推移する¹²⁾。

縄文中期後葉・後期前葉

大きく増加し始める。中期後葉は前段階に比べて3倍になり、後期前葉は更に1.5倍になる。

縄文後期中葉～晩期前半

後期中葉に一時的な減少傾向が生じる。前段階に比べ、約4割程度まで減少する。その数は80前後で、次の後期後葉・晩期前半もほぼ同じ水準が維持されている。

なお、この80前後という数字は、縄文中期中葉以前の約2倍にあたり、減少したとはいえ、以前

よりかなり高い水準が保たれている。

縄文晩期後半

遺跡数が再度増加し、直前段階の2.5倍に至る。

(2) 1遺跡あたりの貯蔵穴の数

各大別時期の貯蔵穴数を表2の②に示した。これを表2の①の遺跡数合計値で除し、1遺跡あたりの貯蔵穴数を求める。ただし、関西全域の遺跡数をもとにしていないので、この値は実数ではなく、相対的な時間的差異を見いだすための目安である。その推移は、表2の③および図2に示した。画期ごとに傾向を述べる。

縄文早期前葉・中葉

貯蔵穴の事例はないので、値は0.00である。

縄文早期後葉～中期後葉

初現は早期後葉で、1遺跡あたりの値は0.06である。以降、前期中葉・後葉で0.15、中期前葉で0.02、中期後葉で0.11といった値が算出されるが、ほかの時期の値はほぼ0.00である。

縄文後期前葉～後葉

1遺跡あたりの貯蔵穴数が大幅に増加する。直前段階に比べて、後期前葉～中葉の値は約5倍に増加し、後期後葉には更に3倍になる。

縄文晩期前半・後半

減少傾向が生じる。直前段階に比べ、晩期前半の値は1/5に減じる。この値は、縄文中期後葉以前より多く、まだ高水準にある。ところが、晩期後半には更に1/6に減少し、出現期の縄文早期後葉なみにまで減じる。

(3) 1遺跡あたりの貯蔵穴の容量

貯蔵穴の容量は、平面規模×深さで概算した。これは実数ではなく、相対的な時間的差異を見いだすための目安である。従って、計算上の単位はm³だが、文中では単位を強いて表記しない。

各大別時期の貯蔵穴容量を表2の④に示した。これを表2の①の遺跡数合計値で除し、1遺跡あたりの貯蔵穴の容量を算出した。ただし、関西全域の遺跡数をもとにしていないので、これも実数ではなく目安である。

その推移は、表2の⑤および図3に示した。画期ごとに傾向を述べる。

縄文早期前葉・中葉

表2 遺跡数と貯蔵穴の容量

(単位：④・⑤ともに立方m)

	早期前葉	中葉	後葉	前期前葉	中葉	後葉	中期前葉	中葉	後葉	後期前葉	中葉	後葉	晩期前半	後半
①遺跡数														
滋賀県域	7	17	19	12	18	16	18	21	49	54	27	29	27	120
京都盆地	2	9	3	1	8	6	8	6	23	54	14	8	29	38
奈良県域	16	14	6	0	8	12	14	5	37	42	22	22	23	43
生駒山西麓	7	3	4	2	6	18	9	10	22	49	16	9	22	54
合計値	32	43	32	15	40	52	49	42	131	199	79	68	101	255
②各時期の貯蔵穴数の合計	0	0	2	0	6	8	1	0	14	118	45	105	35	17
③1遺跡あたりの貯蔵穴の数	0	0	0.06	0	0.15	0.15	0.02	0	0.11	0.59	0.56	1.54	0.34	0.06
④各時期の貯蔵穴容量の合計	0.00	0.00	0.25	0.00	0.00	1.92	0.08	0.00	20.45	25.87	23.19	39.20	42.25	20.08
⑤1遺跡あたりの貯蔵穴の容量	0.00	0.00	0.01	0.00	0.00	0.04	0.00	0.00	0.16	0.13	0.29	0.58	0.42	0.08

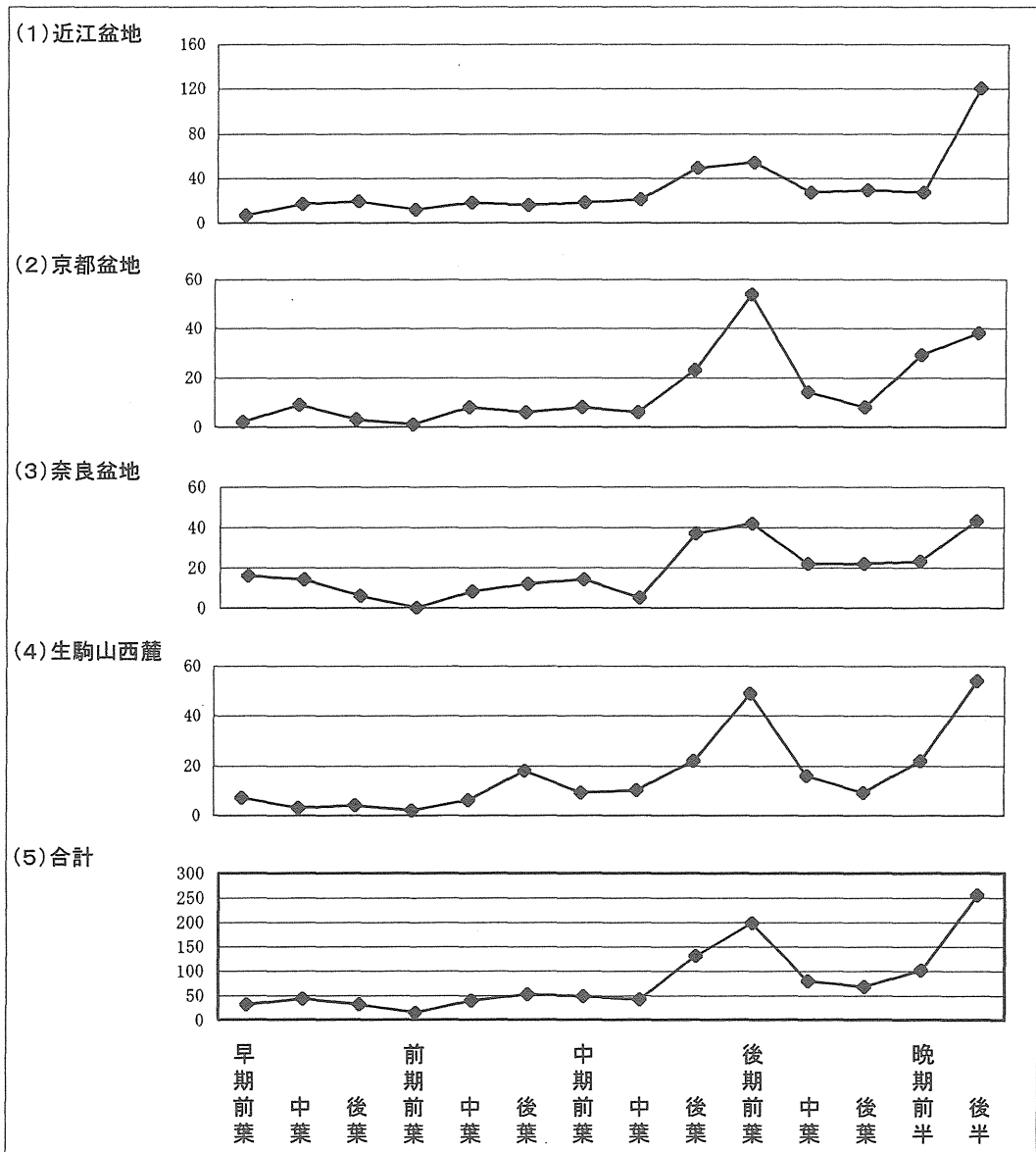


図1 遺跡数の変化

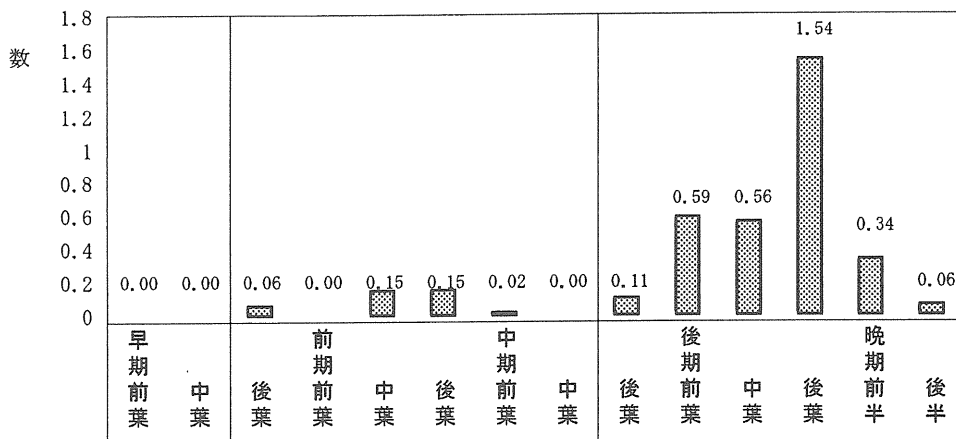


図2 1遺跡あたりの貯蔵穴数の推移

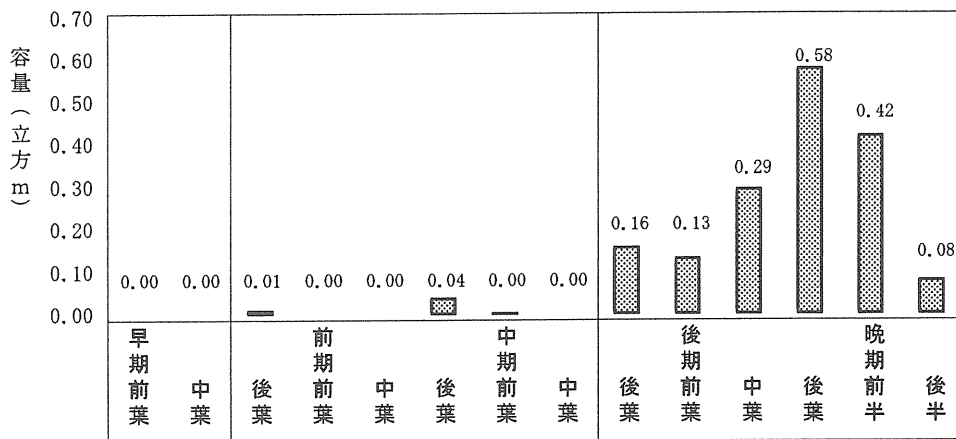


図3 1遺跡あたりの貯蔵穴容量の推移

貯蔵穴の事例はないので、値は0.00である。

縄文早期後葉～中期中葉

初現期である早期後葉の値は0.01である。以降、前期後葉で0.04といった値が算出されるが、ほかの時期の値はほぼ0.00である。

縄文中期後葉～後期後葉

貯蔵穴容量に大幅な増加がみられる。直前段階の1遺跡あたりの容量は限りなく0.00に近いが、中期後葉には0.16にまで増加する。後期前葉はほぼ同規模の0.13なので、同様な傾向が継承されたと考えていだろう。

後期中葉には再度激増し、直前の約2倍になり、後期後葉には更に倍増する。

中期後葉以降、1遺跡あたりの貯蔵穴の容量は大きく増加し始める。

縄文晚期前半・後半

1遺跡あたりの貯蔵穴の数と同様に、容量にお

いても減少傾向が生じる。直前段階に比べ、晚期前半の値は2/3程度に減じる。減少傾向の萌芽といえようが、増大期以降の縄文中期後葉～後期中葉に比べてもかなり高い水準にあり、衰退期とはみなしがたい。

明確に減少・衰退を指摘できるのは、晚期後半で、直前段階に比べ更に1/5に激減する。

4. 結論と課題

以上、1遺跡あたりの貯蔵穴の数と容量の推移を整理した。2つの推移に関する所見と今後の課題をまとめ、稿を閉じる。

(1) 結論

縄文早期前葉・中葉

貯蔵穴の存在が知られていない。今後検出をみたとしても、その数量が後の段階を大きく越えることはないだろう。関西地方におけるこの段階は、

貯蔵行為を強化していない段階だと定義できる。

縄文早期後葉～中期中葉

貯蔵穴が確認され始める時期である。1遺跡あたりの数は0.00～0.15、容量は0.00～0.04である。

存在を確認できるが、その値はごく小さく、また、まだ確認されていない時期もある。このような状況からみて、貯蔵行為を確かに始めているが、特に重視されてはいない段階だと定義できる。

縄文中期後葉

注目すべき時期である。前稿で筆者は、貯蔵穴の増加期をこの縄文中期後葉だと考えた。しかし、1遺跡あたりの数は0.11に留まる。1遺跡あたりの数は、縄文中期中葉以前の値と同じかそれより低い。

したがって、縄文中期後葉に見いだしていた貯蔵穴の「数」の増加は、母数である遺跡数の増加に単に比例していただけであって、貯蔵穴の数からみる限り、縄文中期後葉における貯蔵行為の強化がなされたとはいえない。

ただし、この時期、1遺跡あたりの貯蔵穴の「容量」は大きく増加する。貯蔵穴の容量の増加が、母数である遺跡数の増加を凌駕していたことをこれは意味する。「容量」の増加からみて、この縄文中期後葉に貯蔵行為を強化する戦略に移行した可能性は高い。

以上のことから、縄文中期後葉に貯蔵行為の強化が始まったこと、それは「数」ではなく、「容量」を増やす方向でまず始まったことが指摘できる。

縄文後期前葉～後葉

1遺跡あたりの数・容量の双方、もしくはいずれかが、数倍ずつ増加する。前段階に生じた貯蔵行為の強化がより進む段階である。

縄文晩期前半・後半

1遺跡あたりの数・容量はいずれもが減少する。晩期前半は特に数が大きく減じ、晩期後半は数・容量ともに大きく減じる。

結果として、晩期後半の値は、貯蔵行為の重視が特にみられない縄文中期中葉以前の水準に近くなる。

結論

1遺跡あたりの貯蔵穴の数と容量を検討した結果、以下のような結論が導ける。

- ・縄文中期中葉までは、貯蔵行為が特に重視されたとは言いがたい。

- ・貯蔵行為が強化され始めるのは、やはり縄文中期後葉で、後期後葉に向けてより強化される。

- ・縄文晩期前半、強化の傾向は薄らぎ始める。縄文晩期後半には、貯蔵行為が強化される前の縄文中期中葉以前の水準に近くなる。

(2) 今後の課題

大きく2つの課題がある。

前稿（註5論文）での想定と同様、本稿でも縄文中期後葉に貯蔵穴の増大が見出せ、このことから、この時期に貯蔵行為の強化が進んだ可能性を指摘した。この戦略の導入の歴史的意義を、ほかの考古学的な資料も併せながら語ることが第1の課題である。

これまで筆者は、居住形態の推移や、遺跡数と住居規模の検討からみた人口の増加などを検討してきた¹⁹。第1の課題ではこれらとの関係を問うてみたい。それが目下の課題である。

今回新たに明確になったのは、貯蔵行為の強化傾向が縄文晩期に緩和されていく現象である。これは、特に晩期後半で顕著にみられた。この検討が第2の課題である。

すでに述べたが、関西地方の縄文晩期後半は、一度減少しかけた遺跡数が再び激増する時期にあたる。この時期に、1遺跡あたりの貯蔵穴の数・容量が減少しているということは、遺跡数の増大に、貯蔵行為が関与していなかった可能性を示している。

この点についてはいくつかの背景が考えられる。

たとえば、遺跡数の増加は見かけ上であって、実際の人口は増加しておらず、貯蔵行為のあり方も変化していなかった可能性が考えられる。また、貯蔵形態の変化や、農耕経済への移行に関連する現象なのかもしれない。これらの点の検討を第2の課題としたい。

なお、今回は貯蔵穴以外の貯蔵形態については触れていない。また、大別時期区分の時間の長さが等しかったとは必ずしもいえず、時期間の比較に問題がないわけではない。より適正なモノサシが本来は

必要であろう。これらの検討を重ね合わせることで、また異なる側面が見出せる可能性がある。これも課題に加え、検討を積んでいきたい。

(せぐち しんじ：財団法人滋賀県文化財保護協会)

謝辞

本稿を成すにあたり、第108回近江貝塚研究会(2002年10月19日)での以下のような各氏のご意見が参考になりました。記して感謝いたします。

田中学、村上由美子、森本若葉、佐藤啓介、鈴木康二、辻川哲朗、小島孝修の各氏

註

- (1) チャイルド 『文明の起源』(ねずまさし訳1957) 1936
- (2) ここでは食料貯蔵を指すことにする。
- (3) A. テスタール 『新不平等起源論』 法政大学出版局(山内訳) 1995年
- (4) 潮見 浩「縄文時代の食用植物—堅果類の貯蔵庫群を中心として—」『考古論集』松崎寿和先生退官記念事業会 1977
- (5) 瀬口眞司「関西地方における縄文時代の集石遺構と貯蔵穴——(減少・小型化する遺構/増加・大型化する遺構)と居住形態の関わり——」『文化財学論集2』文化財学論集刊行会 2003年8月刊行予定
- (6) 関西縄文文化研究会編『関西縄文時代の生業関係遺構』2001
- (7) 複数の大別時期にまたがる貯蔵穴群のデータは、便宜上、その大別時期の数で除して、各時期に配分した。たとえば、ある遺跡で、縄文後期前葉～後葉の貯蔵穴が30基検出され、その容量合計が30立方mだった場合、前葉・中葉・後葉に10基10立方ずつ割り振った。
- (8) 瀬口眞司「近江における縄文社会の展開過程に関する覚書 地域の検討1・3・5」『紀要11・12・13号』財団法人滋賀県文化財保護協会 1998・1999・2000
小島孝修「近江における縄文社会の展開過程に関する覚書 地域の検討2・4・6」『紀要11・12・14号』財団法人滋賀県文化財保護協会 1998・1999・2001
- (9) 千葉 豊「京都盆地の縄文時代遺跡」『京都大学構内遺跡調査研究年報1989～1991年度』 1993
- (10) 松田真一『奈良県の縄文時代遺跡研究』 財団法人由良大和古代文化研究協会 1997
- (11) 大野 薫「生駒山西麓域の縄紋集落」『河内古文化研究論集』 柏原市古文化研究会 1997
- (12) 縄文前期前葉以降の各大別時期の長さは約300年である。その一方で、縄文早期前葉～後葉の各大別時期の長さはその約3倍の1000年前後と考えられる。この差異を考慮すると、早期前葉～後葉の遺跡数は、各大別時期をさらに3細分した上で検討する必要があるかもしれないが、本稿では大きな影響が出ないので捨象しておく。
- (13) 瀬口眞司「縄文時代の琵琶湖周辺における人類の適応」『第50回埋蔵文化財研究集会発表要旨集』 九阪研究会 2001
瀬口眞司「住まいの移ろい—関西地方の縄文時代の住居に関する基礎的操作—」『往還する考古学』近江貝塚研究会 2002

編集後記

今年度も、全国の遺跡で数多くの発見が新聞紙上を賑わせました。県内においても、膳所城下町遺跡・鍛冶屋敷遺跡をはじめとして多くの遺跡調査で成果を挙げることができました。そして現地説明会では、多くの考古学ファンや地元の方々に見学していただくことができました。

今号に掲載されている論考は、遺構・遺跡論から保存科学と幅広く、多岐にわたり、今年度の発掘調査に関連する最新情報や成果を反映させたものも含まれています。これらの論考が、埋蔵文化財の調査に携わる者の一助となり、我々の仕事である文化財の保護・普及活動の一翼を担っていくものと信じております。

m()m

平成15年(2003年)3月

紀要第16号

編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会

大津市瀬田南大萱町1732-2

電話 (077)548-9780・9781

FAX (077)543-1525

URL <http://www.shiga-bunkazai.jp/>

E-mail mail@shiga-bunkazai.jp

印刷・製本 (株)スマイ印刷工業

栗東市川辺568番地2

TEL 077-552-1045